

NEXT CONCERTS

>> 次回東京定期演奏会

第 **739** 回

サントリーホール

2022年4月1日(金)19:00開演

2日(土)14:00開演 (「本日の聴きどころ(プレトーク)」13:30~)

巨匠小林研一郎によるドイツ音楽の本流。 シューマンとブラームスの師弟による2つの「4番」

指揮: **小林 研一郎**
[桂冠名譽指揮者]

シューマン: 交響曲第4番 二短調 op.120

ブラームス: 交響曲第4番 ホ短調 op.98

©山本 倫子



次回東京定期演奏会指揮者にインタビュー!

聞き手 伊熊 よし子

[ふたつの交響曲に潜む“ゆううつ”な空気を表現したい
—それを聴きとってほしいのです]

「コバケン」の愛称で親しまれている指揮者小林研一郎の情熱的で真摯でひたむきな演奏姿勢は、「炎のマエストロ」と称される。しかし、実際の演奏は楽譜の裏側に迫る知的で冷徹で洞察力に富む眼が備わったもの。どんなに激しく強靱な音をオーケストラから導き出そうと、自身はパシスチック(厭世的、悲観的)な性格を前面に現し、作品の内奥に肉薄し、作曲家が音符に込めた苦悩や悲劇や慟哭を代弁していく。そこにはこれまで聴いたことのない世界が広がり、聴き手の心を震わせる。4月の東京定期演奏会

のシューマンの交響曲第4番とブラームスの交響曲第4番という組み合わせは、コバケンのこだわりのプログラム。まず、その選曲から話を伺うと…。

「最初にシューマンの交響曲第4番を演奏したいと考え、それに組み合わせる形でブラームスの交響曲第4番を選びました。ふたりの作曲家のドラマを表現し、その時代を描き出したいと思ったからです。シューマンの作品には“暗いよどみ”が潜み、独特の世界が広がっている。彼はベートーヴェンの前の時代に戻ろうとしていたのではないのでしょうか。一方、ブラームスはベートーヴェンから離れて、どこかに向かおうとしていたように思えます。そしてこの2曲は、それぞれの作曲家が“死”を意識しているように思われてなりません。自身の持ち味を存分に生かし、まさに“死への”のような趣を呈しています」


コバケンさんの演奏はいずれの作品も深遠でほの暗く、情感が横溢し、心の奥にグサリと突き刺さってくるようなはげしさを内包している。ただし、彼はどんな作品もいま生まれたばかりの作品に対峙するような新鮮な思いを抱き、オーケストラから清新な響きを引き出すことも事実である。その新風を全身にまとうと聴き手も活力と前に進む勇気が与えられ、至福の時を過ごすことができる。

「オーケストラは非常に才能豊かな人たちの集まりで、私は常に彼らから持てる最高のものを引き出すにはいかにしたらいいかと、そればかり考えています。それには、私自身が作品の奥深いところまで、こまかな部分にまで理解を深め、作曲家の意図したところに近づかなくてはなりません。オーケストラにこれまで聴いたことのないような音を出してほしいと願うのは、聴き手に新たな体験をしてほしいからです。今回もそれを目指します」

コバケンさんはシューマンの交響曲では第4番をこよなく愛し、ブラームスの第4番も昔から何度も演奏してきたという。

「シューマンの第4番は、心のひだにひらめいてくる作品なのです。常に、もっと感覚を掘り下げてみたいと考えます。第1楽章のテーマが全編を貫き、二短調の暗さが人々の心を覆い尽くす。第2楽章のカンタービレ、第3楽章の異質な雰囲気を経て、第4楽章は遠い国からの誘いのよう。この第4楽章の始まりが、まさにゆううつな中から巨大な光が現れる感覚なのです。人々の胸にもう一度独特な気持ちを喚起する、ここを聴いてほしいですね。また、ブラームスの方は、f(フォルテ)ひとつという表記の箇所も、私はfを4つくらいで演奏したい。

私は毎朝、譜読みをしますが、作曲家でもありますので、スコアを深く読むのは得意なのです。その折に、いままで気づかなかった新たな発見があり、心が高揚します。コロナ禍で演奏する機会は減っていますが、その分スコアを読む時間が増えました。今回は、その成果を存分に披露したいと思っています。聴衆の皆様を異次元の世界へと誘いたいです!!」

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
独立行政法人 日本芸術文化振興会

1回券料金 S ¥8,000 A ¥6,500 B ¥6,000 C 完売 P ¥4,000 Ys (25歳以下) ¥1,500

※障害者手帳をお持ちの方は割引がございますので、サービスセンターにお問い合わせください。